

〈特集「ヴォイスとその周辺」〉

## ラトヴィア語アンケート

堀口 大樹

(1a) 《風などで》ドアが開いた.

Durvis atvērās.

door-NOM opened

再帰動詞 atvērties 「(が) 開く」である.

(1b) (彼が) ドアを開けた.

Viņš atvēra durvis.

he-NOM opened door-ACC

他動詞 atvērt 「(を) 開く」である.

(1c) 入口のドアが開けられた

Ieejas durvis tika atvērtas.

entrance-GEN door-NOM was opened

助動詞 tikt + 受動過去分詞で受動態を表す.

Atvēra ieejas durvis.

they opened entrance-GEN door-ACC

また能動態で他動詞の3人称形(3人称では単数・複数は同形)で主語を明示しない場合、結果的に受動の意味となる.

(2) 私は(自分の)弟を立てせた.

Es liku brālim piecelties.

I-NOM made brother-DAT to stand up

使役の動詞 likt 「させる」を用いる。「弟」は与格、動詞「立つ」は不定形である.

(3) 私は(自分の)弟に歌を歌わせた.

Es liku brālim dziedāt dziesmu.

I-NOM made brother-DAT to sing song-ACC

(2)と同様に使役の動詞 likt 「させる」を用いる。

(4a) 《遊びたがっている子供に無理やり》母は子供にパンを買いに行かせた。

Māte pavēlēja bērnam aiziet pēc maizes.  
mother-NOM commanded child-DAT to go out for bread-GEN

動詞 pavēlēt 「命令する」を用いる。「子供」は与格、動詞「行く」は不定形である。

(4b) 《遊びに出たがっているのを見て》母は子供を遊びに行かせた。

Māte (at)ļāva bērnam aiziet spēlēties.  
mother-NOM allowed child-DAT to go out to play

動詞(at)ļaut 「許可する」を使う。接頭辞があると、子供が許可を求めたうえで許可をするというニュアンスがある。

(5a) 私は弟に服を着せた。

Es apģērbu brāli.  
I-NOM wore brother-ACC

他動詞 apģērbt 「(誰かに) 服を着させる」を用いる。弟が直接補語で対格である。

(5b) 私は弟にその服を着させた。

Es uzvilku/uzģērbu brālim tās drēbes.  
I-NOM wore brother-DAT those-ACC clothings-ACC

他動詞 uzvilkt/uzģērbt 「(何かを) 着させる」を用いる。この場合、弟が間接補語で与格を取り、服が直接補語で対格を取る。

(6) 私は弟にその本をあげた。

Es iedevu brālim to grāmatu.  
I-NOM gave brother-DAT that-ACC book-ACC

動詞 iedot 「与える」は直接補語に対格、間接補語に与格を取る。

(7a) 私は弟に本を読んであげた。

Es (no)lasīju brālim grāmatu.  
I-NOM read brother-DAT book-ACC

やりもらいの表現手段は基本的にないが、動詞 *lasīt* に接頭辞 *no-* を付加した動詞 *nolasīt* 「(人前で、誰かのために) 読む」を用いることができる。接頭辞 *no-* は一部の動詞と結びつくと、「人前で、誰かのために」という語彙的意味を元の動詞に与える。

(7b) 兄は私に本を読んでくれた。

Brālis            man    (no)lasīja grāmatu.  
brother-NOM    I-ACC read        book-ACC

(7a)と同様である。

(7c) 私は母に髪の毛を切ってもらった。

Man        māte            apgrieza matus.  
I-DAT    mother -NOM cut        hair-ACC

やりもらいの表現手段は基本的に存在しない。

(8a) 私は(自分の)体を洗った。

Es        nomazgājos.  
I-NOM    washed myself

再帰動詞 *nomazgāties* 「(自分の体を) 洗う」を使う。

(8b) 私は手を洗った。

Es        nomazgāju rokas.  
I-NOM    washed        hands-ACC

他動詞 *nomazgāt* 「洗う」を使う。

(8c) 彼は(／その人は)手を洗った。

Viņš        nomazgāja rokas.  
he-NOM    washed        hands-ACC

他動詞 *nomazgāt* を使う。

(9) 私は(自分のために)その本を買った。

Es        nopirku sev            grāmatu.  
I-NOM    bought    oneself-DAT book-ACC

代名詞の間接補語の与格 *sev* 「自分に」を使う。

(10) 彼らは（／その人たちは）（互いに）殴り合っていた。

*Viņi kāvās.*

they-NOM fought each other

再帰動詞 *kauties* 「殴り合う」を使う。

(11) その人たちは《みな一緒に》町へ出発した。

*Viņi aizbrauca/sabrauca uz pilsētu.*

they-NOM went out/went together to city-ACC

動詞 *braukt* 「行く」に接頭辞 *aiz-* 「離」が付加された *aizbraukt* 「出発する」を使う。この場合「みな一緒に」という動作の様態は現れない。「みな一緒に」という様態は接頭辞 *sa-* が表しうるが、動作の主体、客体が多いことも示される。*sabraukt* は「(大人数が) 行く」である。

(12) その映画は泣ける（その映画を見ると泣いてしまう）。

*Skatoties to filmu var raudāt.*

watching that-ACC film-ACC they can to cry

付帯状況を示す副分詞 *skatoties* 「見ることによって」と、可能を示す動詞 *varēt* 「できる」+動詞の不定形を用いる。3人称形で主語を明示しないと、人一般という不定人称の意味になる。

(13a) 私は卵を割った。

*Es sasitu olu.*

I-NOM broke egg-ACC

動詞 *sasist* 「割る」を用いる。

(13b) 《うっかり落として》私はコップを割った（／割ってしまった）。

*Es sadauzīju/saplēsu glāzi.*

I-NOM broke glass-ACC

動詞 *sadauzīt* 「壊す」や *saplēst* 「割る」を用いる。

(14a) きのう私はコーヒーを飲みすぎて（飲みすぎたので）眠れなかった。

Vakar es pār dzēros kafiju un nevarēju aizmigt.  
yesterday I-NOM drank too much coffee-ACC and I could not to fall asleep

可能を示す動詞 *varēt* 「できる」の否定形を使う。

(14b) きのう私は仕事がたくさんあって（たくさんあったので）眠れなかった。

Vakar man bija tik daudz darbu, ka man nesanāca gulēt.  
yesterday I-DAT was so many works-GEN that I-DAT could not to sleep

可能を示す動詞 *sanākt* 「うまくいく」を使う。この場合動作の主体は与格で示される。

(15) 私は頭が痛い。

Man sāp galva.  
I-DAT hurt head-NOM

動詞 *sāpēt* 「痛む」は痛む部位が主格，経験者が与格で示される。

(16) あの女性は髪が長い。

Tai sievietei ir gari mati.  
that-DAT woman-DAT is long-NOM hair-NOM

所有の表現で示される。ラトヴィア語の所有の表現は所有者が与格，動詞は存在を示す *be* 動詞，所有物が主格で示される。

(17a) 彼は（別の）彼の肩を叩いた。

Viņš uzsita pa viņa plecu.  
he-NOM tapped on he-GEN shoulder-ACC

「彼の肩」には2通りの表し方がある。1つめは「彼」を属格で示し、「肩」に修飾させる。

Viņš uzsita viņam pa plecu.  
he-NOM tapped he-DAT on shoulder-ACC

もう1つは、動作の受け手である「彼」を与格で示す方法である。

(17b) 彼は（別の）彼の手をつかんだ。

Viņš saķēra viņa roku.  
he-NOM seized he-GEN hand-ACC

(17a)と同様に、「彼の手」の「彼」は属格で示される。

Viņš saķēra viņam roku.  
he-NOM seized he-DAT hand-ACC

(17a)と同様に、「彼の手」の「彼」は動作の受け手として与格で示される。

(18a) 私は彼がやって来るのを見た。

Es redzēju, ka viņš nāk.  
I-NOM saw that he-NOM come

知覚構文は、従属節を導く接続詞 *ka* を用いるのが一般的である。英語のように主節と従属節の時制の一致はない。*nāk* は現在形である。

Es redzēju viņu nākam/nākot  
I-NOM saw he-ACC coming

従属節を用いない知覚構文も可能である。この場合彼が対格に、知覚動詞の対格補語の修飾に特化した半分詞 *nākam* 「来るのを」、または付帯状況を示す副分詞 *nākot* 「来ながら」を用いる。

(18b) 私は彼が今日来ることを知っている。

Es zinu, ka viņš šodien nāks.  
I-NOM know that he-NOM today will come

従属節を導く接続詞 *ka* を用いる。

(19) 彼は自分（のほう）が勝つと思った。

Viņš domāja, ka uzvarēs.  
he-NOM thought that he will win

従属節を導く接続詞 *ka* を用いる。

(20a) 私は（コップの）水（の一部）を飲んだ。

Es padzēru ūdeni.

I-NOM drank water-ACC

接頭辞動詞 padzert「少し飲む」は、動作が対象の部分に及ぶことを示す。補語は対格である。対象に部分的に及ぶ動作は、補語の形態的表示では示されない。

(20b) 私は（コップの）水を全部飲んだ。

Viņš izdzēra ūdeni.

he-NOM drank up water-ACC

接頭辞動詞 izdzert「飲み干す」は、動作が対象すべてに及ぶことを示す。補語は対格である。対象全体に及ぶ動作は、補語の形態的表示では示されない。

(21) あの人は肉を食べない。

Viņš neēd gaļu.

he-NOM not eat meat-ACC

現代ラトヴィア語では否定文における直接補語は、否定属格ではなく対格を用いる。

(22a) 今日は寒い。

Šodien salst/ir auksts.

today it colds/it is cold

動詞 salt「寒い」、もしくは形容詞の男性形を用いる。

(22b) 私は（何だか）寒い（私には寒く感じる）。

Man salst/ir auksti.

I-DAT it colds/it is cold

動詞 salt「寒い」、もしくは be 動詞+副詞を用いる。主体は与格で示される。

(23) 私は人がとても多いのに驚いた。

Mani pārsteidza cilvēku daudzums.

I-ACC surprised man-GEN quantity-NOM

動詞 pārsteigt「驚かせる」を用いる。補語の「私」は対格、「人の多さ」が主格である。

Es        biju pārsteigts/izbrīnīts    par    cilvēku    daudzumu.  
I-NOM    was surprised/astonished    about man-GEN    quantity-ACC

be 動詞＋受動過去分詞の受動態を用いることも可能である。

(24) 雨が降ってきた。

Lietus        sāka    līt.  
rain-NOM    started    to rain

現場での直接体験を示す特別な方法は存在しない。

(25) その本は良く売れる。

To        grāmatu        labi    pērk.  
that-ACC    book-ACC    well    they buy

「その本を人々はよく買う」と示される。能動態で動詞の形は主語を明示しない3人称である。

Tā        grāmata        labi    pārdodas.  
that-NOM    book-NOM    well    is sold

ロシア語の影響により、動詞 pārdot 「売る」を再帰動詞 pārdoties にすることで中間構文を示すことがある。しかし規範主義の立場では、ラトヴィア語では再帰動詞は中間構文を示すことができないとされ、一般に認められていない。